

徳島(24日)、宮崎(20日)、鹿児島(19日)があるのみで、8月10日前後が多く、7月に初鳴の聞かれた所が10箇所もある。

(6) アキアカネ

本種の初見日は12回観察しているが、非常にばらつきが多い。平均すると6月23~24日となる。大後ら(1947)にはトンボ全体として記載され、アキアカネ単独のものはない。したがって他と比較することはここでは不可能である。ただ本種の初発は目立たないため見落としていた可能性があり、6月20日頃が普通なのではなかろうか。

3. 1990年(平成2)の初見・初鳴

この年は前年の12月から暖冬で、年間を通じて高温の年であった。12月28日付北日本新聞天地人欄につきのようなことが記されている。

「今年の日本は高温続き、富山でも2月以降はいずれも高く、年間平均気温は15.1度と観測史上最高値となった。平年より1.4度も上回る。全国でも8割の气象台が記録を更新。おかげで各地からサクラ、サツキ、ヤマブキなど時ならぬ花だよりが寄せられている」と。筆者もサクラその他で早い例を観察している。新聞でも普通4月上中旬から出現するギフチョウが、酒井秀紀、荒川良氏などにより3月21日八尾町と山田村の山林で採集されたことを報じている(北日本新聞3月23日)。また6月下旬から発生し7月中旬が最盛期になるゲンジボタルが6月8日付北日本新聞に城端町大窪地区で乱舞がはじまっていると報じている。これらのほか例年より早いという情報をいくつも聞かされている。

今回取りあげた6種の昆虫も早い出現を示している。特にニイニゼミは全初鳴日の2番目、アブラゼミ、ツクツクボウシは飛び離れて1番目、アキアカネの初見は4番目となっている。これらは今年の高温による影響なのであろうか。

引用文献

1. 大後美保・鈴木雄次(1947):日本生物季節論、北隆館(東京)、217PP.
2. 富山県統計課(1989):富山がわかる本、富山県統計協会(富山)、244PP.

イ ラ ガ

田中忠次

富山県にはイラガ科の蛾は10種知られているが、もっとも普通でもっともよく知られているのがイラガである。本種は開張33mm内外、頭胸部及び前翅は黄色、前翅の外半は褐色を帯び、翅頂から褐色の2線が走る。後翅は淡褐色である。

幼虫は肉突起に刺毛を持ち、見るからに怖そうな体をしている。これにさわると激しい疼痛をおぼえる。冬越しは幼虫体で固い繭の中で行う。宇奈月町の朽屋など一部ではオコジョと呼んでいるが、県内の多くの場所ではシナンタロウと呼んでいる。カキやモミジなど種々の広葉樹の葉を食べる。

戦後農薬散布が行われてから一時非常に少なくなっていた。かつて筆者が広島大学の中川逢吉氏(故人)から昆虫の冬越しについて依頼され、写真撮影のため繭を探したがなかなか見つからず困ったことがある。富山県昆虫研究会(1979)の記載を見ても1973年鐘釣で2♂が記録されているのみである。

1981年県道黒部宇奈月線の一部で拡巾工事が行われ、それに伴い自宅に植えておいたシラカバを切らなければならないことになった。その折、切り落とした枝の葉に思いもよらないムラサキイラガの幼虫が多数いるのに驚いた。またモミジの葉にいることも知った。しかし翌年からは注意しなかったこともあって本種の幼虫を見かけていなかった。ところが1990年再びカキとコマユミの葉土に数頭の幼虫のいることを知った。今後も当地に本種を見ることであろう。

さて上記のムラサキイラガの幼虫が見られた頃からイラガ(?)に刺されることが多くなった。しかしその頃はまだイラガが少なく、多くはクロシタアオイラガの幼虫で特にウメに多く見られ、ハナズボウその他の植物にもかなりの個体が見られた。本種は山地や山間地で灯火採集をするとよく飛来するが、平地での採集記録のなかった種である。1987年本種幼虫の多かったウメが枯死し、そのためか現在はほとんど見つからない。

イラガ幼虫が多く見られるようになったのは1988年頃からで、1989年には川ぶちに植えてあるコマユミにも繭が目立って多かった。この年コマユミにあった繭をボール箱に入れて置いたところ、翌年の6月成虫がでていた。見るのが遅かったため既に固くなっていたが羽化したあとの繭にふたの残っているもの、ふたの落ちてしまっているもの、羽化時を思わせる蛹の脱殻の残っているものがあった。今までこのようなものを見たことがなかったので非常に珍しく感じた。その時撮影した写真のうち1枚が図6である。

このことに非常に興味を感じていた折、たまたまTTS昆虫図書で石井象次郎氏の「イラガのマユ

のなぞ」という著書のあることを知った。早速取り寄せてみたところ、子供向けの本であるが、非常にユニークで興味深く、有益なものであった。成虫が固い繭から外に出る仕組みについてこの本には『繭のふたとなって切れる所は輪のようになってわずかにふくらみ、そこが繭の厚さ約4mmの半分、約2mmになっている。この切れ口は幼虫がいたものに間違いはないが、いっとうやっつけられたいのかよくわかっていない。口からはいた液で褐色の層ができてから、きれ口を入れその上に絹糸の層をつくったと考えられる。』といろいろの観察や推理を加えながら書かれている。筆者が成虫の出たしまった殻の脱出孔の直径を測ってみたところ、繭の大小にあまり関係なく5mmであった。

1990年自宅の庭にイラガが多く、庭木の手入れをする時手袋をしていたが、それでも刺されることがあった。特にカキに多く見られた。やがて繭をつくったので大きさなどを調べようと思った。ところがあれ程幼虫が多かったのに繭は以外に少なく46個得たに過ぎない。そのうち昨年多かったコマユミからは9個、モミジから3個で、あとは5本のカキの木からであった。そして不思議なことによく多くの幼虫の見られた木からはわずか4個で、残りのほとんどは他の1本の木からでまっただけの木もあった。はじめからほとんどいなかった木があるらしい。また多くあった木は目立たない日陰に近い所にある木である。幼虫が多くいて繭の少なかった木は日向にあり、鳥にでも食べられたのであろうか？得られた繭についてつぎのことを調べてみた。

(1) 繭のつくられた位置

繭は多くは枝につくられるが、特に分岐点に多く、直枝には少なかった。すなわち46個中分岐点につくられたものはカキの木に26個、コマユミに4個、モミジに3個、計33個、直枝につくられたものはカキの木に8個、コマユミに5個、計13個で、分岐点につくられたものは直枝につくられたものの2.5倍であった。

(2) 繭の大きさ

繭は楕円形をしているのでパスの1種で長径と短径を測ってみた。その結果は別表のとおりである。

この表をみると長径13~14mm、短径9~10mmのものが特に多く、長径の平均は13.5mm、短径の平均は9.7mmで、その比は1.4:1となる。

(3) 繭の斑紋

石井象次郎氏は繭の斑紋について、野外における観察と、祝いばしと太いはしや丸

イラガ繭の大きさ (mm)

長径 \ 短径	11	12	13	14	15	計
8	1	—	1	—	—	2
9	—	8	10	1	—	19
10	—	1	1	14	3	19
11	—	—	—	1	4	5
12	—	—	—	—	1	1
計	1	9	12	16	8	46

棒を使って実験をしたことから、細い枝や実験に用いた祝いばしには鮮やかなしま模様の繭の割合が高かったことを述べている。しかし逆の場合もあるので、必ずしもきまっていないと記している(詳細略)。

筆者も所持の繭について調べてみた。まず明瞭な斑紋の形成されているものと不明瞭なものに分けてみると、明瞭なもの32に対し不明瞭なもの14であった。その内訳はつぎの通りである。ただし枝の直径のmmを略し、個数を括弧内、枝の分岐点にあったものはYで表すことにする。なお分岐したものは分岐直前の直径を測ることにした。

カキ：斑紋の明瞭なもの

3(1), Y4(6), Y5(6), 5(1), Y6(2), 6(1), Y7(3), Y9(4), Y10(2), 平均6mm。

斑紋の不明瞭なもの

Y4(2), Y5(1), 6(2), 7(2), 8(1), 平均6mm。

コマユミ：斑紋の明瞭なもの

3(1), Y4(1), Y5(1), 平均4mm。

斑紋の不明瞭なもの

2(1), 3(1), 4(1), Y5(1), 6(1), 平均4mm。

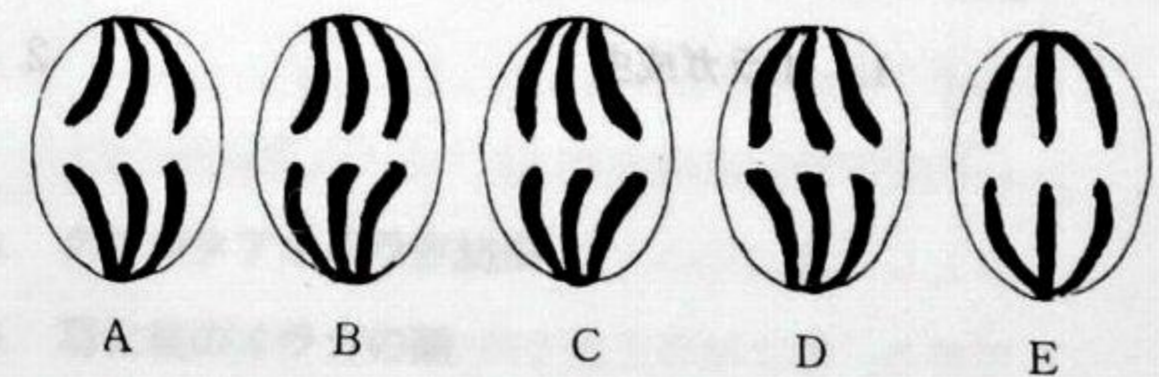
上記のことからみれば、枝の太い細いによって差はみられない。

つぎに繭の付着している分岐点を測定してみると、もとの枝より1~4mm広く、特に2~3mm広いものが多く、概して直枝より付着点の巾が広い。このことをもとにしてみると、カキの分岐点のものでは明瞭なもの23に対し不明瞭なもの3、直枝では明瞭なもの3に対し不明瞭なもの5、コマユミの分岐点のものでは明瞭なもの2に対し不明瞭なもの2、直枝では明瞭なもの1に対し不明瞭なもの4である。

このような整理の仕方からみると、石井氏の観察や実験などと必ずしも一致していないが(石井氏が実験に用いた丸棒の15mmよりすべてが細いことも考慮)、氏がくりかえし述べているように、付着面の広さは斑紋のはっきりするしないの絶対条件でないことがはっきりしている。

つぎに黒褐色の斑紋に注目してみる。

分岐点でつくられた繭は33個で、付着点側(裏と仮称)が広く黒褐色になっているものは19個、残り14個でも付着点の線斑が大きくなる等裏が暗色になる傾向がみられた。



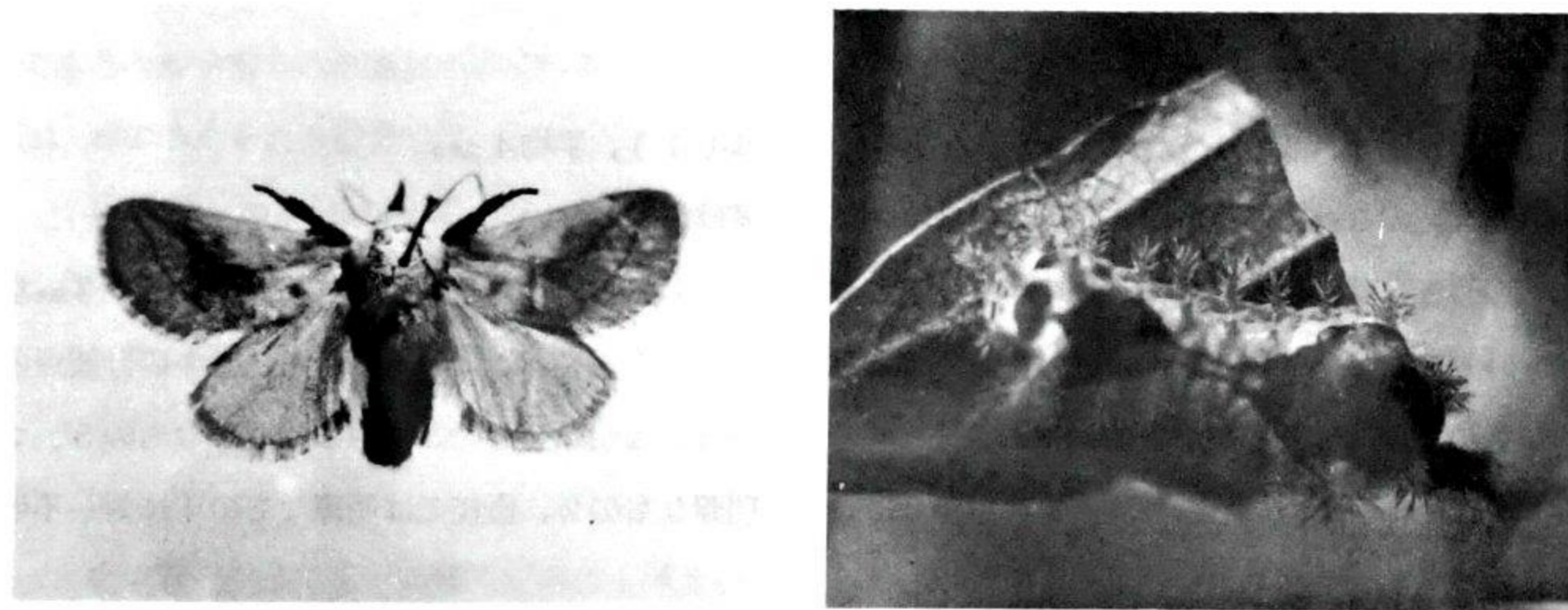
繭の斑紋の型

斑紋の方向や大きさなどに変化が多く、斑紋が途中で消えたり消滅して少なくなっているものもあるが、大きく分けて別図のように5つのタイプになると思う。検した結果はつぎのようである。すなわちA型8、B型6、C型5、D型7、E型7となり、ほぼ同数に近い値となっている。それにしてもどうしてこのような斑紋ができるのか不思議である。

参 考 文 献

- 石井象二郎(1989)、イラガのマユのなぞ、偕成社。
- 六浦 晃ほか(1972)、原色日本蛾類幼虫図鑑、保育社。
- 富山県昆虫研究会(1979)、富山県の昆虫、富山県。

イラガ写真1



1

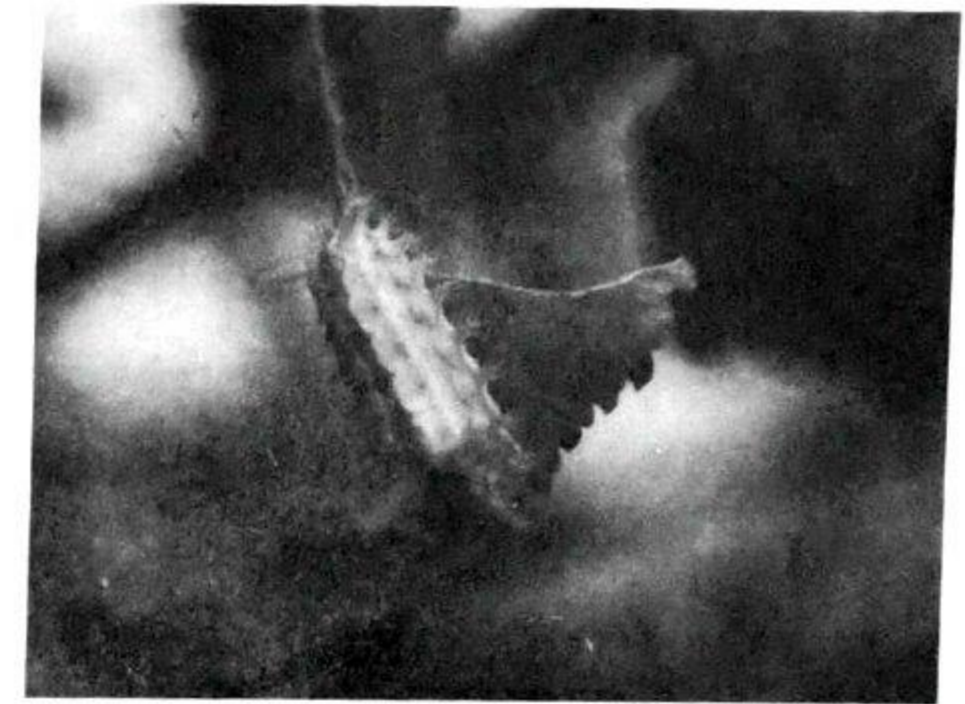
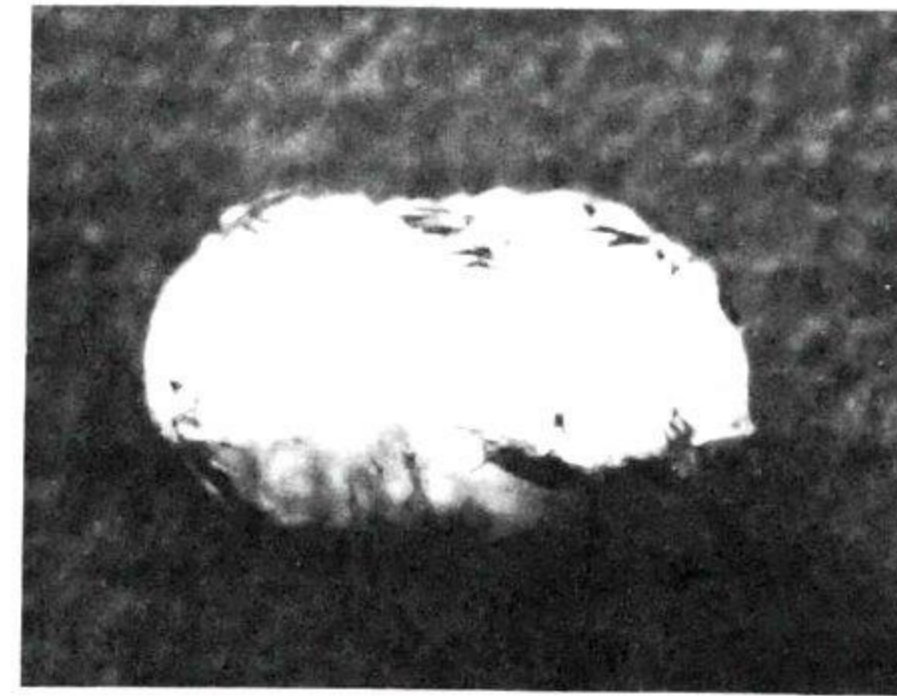
2



1. イラガ成虫

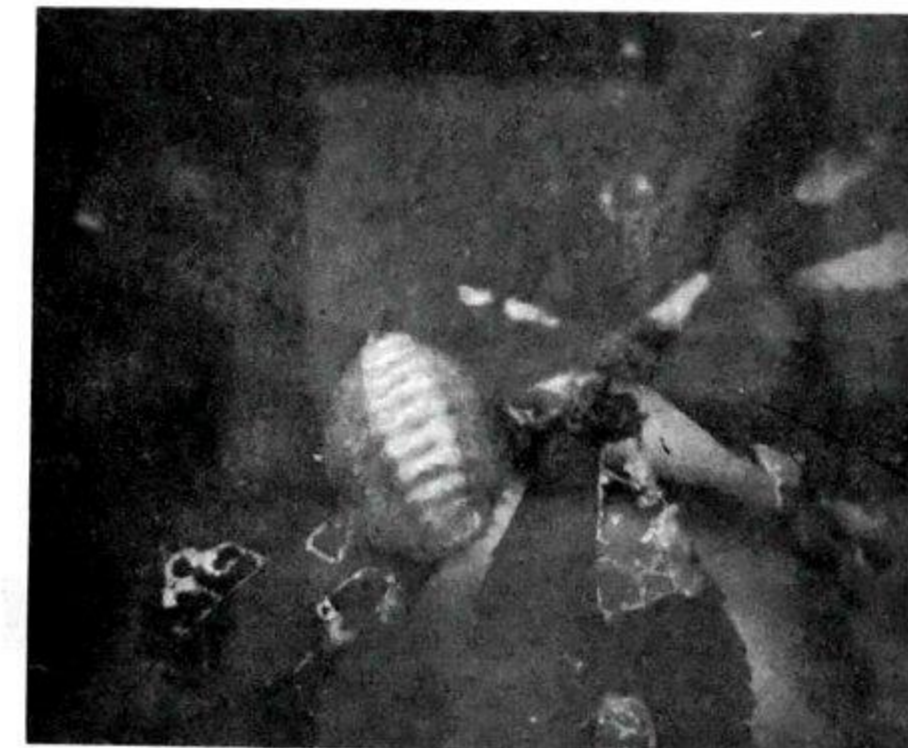
2. イラガ幼虫

イラガ写真2



3

4



5



6

3. 繭の中のイラガ越冬幼虫

4. クロシタアオイラガ幼虫

5. ムラサキイラガ幼虫

6. 羽化後のイラガの繭